

九州朝陽会報

平成二十一年三月十五日発行 第八号

連載 「へ新宿Vの思ひ出」

第一回 「卒業60年」

朝陽同窓会顧問・九州朝陽会特別会員
佐藤 喜一(一〇回)

昭和24年3月5日

この日、都立第六新制高等学校の第一回卒業式が挙行された。卒業生九十四名。その中に、わたしもいた。六十年前前のことである。

入学したのは、昭和18年4月。二百九十一名が府立六中の正門をくぐり、7月に都立六中になる。

19年12月から「あ、紅の血は燃ゆる」なんて歌に鼓舞されて工場へ動員、翌年夏に敗戦。ガラス窓も破れた旧い校舎でしっかり学び、中学四年修了・五年卒業で上級学校へ進学した仲間と別れて新制高校の三年となり、その日めでたく卒業したのだった。

そのころ巷でにぎわっていた流行歌は「湯の町エレジー」。作詞は「あ、紅の…」と同じ野村俊夫であった。

鉄道少年だったわたしは、ポツポツになるべく大学は技術系の学部へと進んだのだが、どうい



かポイントを切り換えて、文学科のレールを走り始めた。そして、高校卒業時には考えてもいなかった国語教師となり、都立富士・青山を経て七年後に母校の教壇に立った。そこで二十四年、後輩の諸君たちと、実に楽しく過ごさせていただいた。

卒業して十四年経って母校へ戻った時、校舎はずいぶん汚れていたけれど、諸先生方は温かく迎えてくださった。中・高時代にご指導を受けた先生方もかなりおられて、生徒に戻ったような気さえした。

国語科に恩師が一人おられた。玉木繁夫というわたしの高三の担任でもあった先生だ。昭和18年から二十三年間へ新宿で勤務された。

ご自分のことは何も語られなかったが、風貌からして、かつては文学青年であったと想像される雰囲気を感じておられた。クドクドうるさいことは言われぬが、人の道にはずれそうなき生徒には「喝!!」を与えられた。お酒大好き先生で、時々お供をした。ある夜、

「佐藤よ、へアカシヤの雨がやむとき」とおっしゃる。ハイとうなずくと、「歌え」

と。そこで西田佐知子ばりに♪アカシヤの雨にうたれて

このまま 死んでしまいたい…♪

と歌った。カラオケなんてない時代である。わが歌をうまいとも下手とも言わず先生は、「このうたは実にいい」と吹き、また盃を傾けられる。



ふっと、先生も多くの挫折感を味わって生きてこられたんだろうと、思った。玉木先生は昭和41年3月に退職された。簡単に身のまわりのものを整理すると、わたしに、机の引出しの中のもの、適当に処理してくれとおっしゃって、教官室を出られた。

後日引き出しを開けてみたら、雑多なものの中に、B4サイズ二つ折りの書類綴りが出てきた。紙はすっかり赤茶けている。開けてみて驚いた。なんとそれは、「昭和23年度第一回卒業生」

3年B組報告書原稿

であった。進学の際に大学側に提出するあの調査書の下書き——成績はもちろん席次の段階別評価や活動の記録などを記載した文書——なのである。むろん、わたしのもあった。

他の方にとっては無用の紙片であろう。けれどわたしにとっては実に貴重な記録である。捨てる気などない。焼却する気もない。私はひそかに持ち帰り保存することにした。

あまり卒業学年の担任をなされ

なかつた先生だった。だからこそ、あの混沌とした時代のわたしたちの記録を、先生は懐かしく思って保存されておられたのだらう、と考え、わたしはこの遺品をまだ大切に持ちつづけ、時折虫干ししながら若き日を偲んでいる。そして、わたしが旅立つ時、銀河列車と一緒に乗せて、先生にお返ししようか、などと考えている。

この3月5日、わたしたちは卒業60年を記念して同期会を開いた。良く晴れた日で、新宿のまちを見下ろせるホテルからは、母校校舎の先に御苑が広がって見えた。わたしは、六中時代の校歌の一節を口ずさんでいた。

♪木々の翠を見やりつつ

学ぶ心の清きかな：♪と。

【編者より】20年度総会に佐藤先生をお招きしてご講演いただきましたが、短い時間ゆえ語り尽せないことも多いので、あらためて、「へ新宿Vの思ひ出」の連載執筆をお願いしました。お楽しみに。(先生ありがとうございます！)

ちなみに、タイトルの「思ひ出」は、福岡県柳川出身の北原白秋の詩集名にあやかられたとのこと。

【発行元】九州朝陽会事務局
〒811-3221 福津市若木台1-20-7
TEL & FAX: 0940-43-5545

【事務局長】小泉純理(新7回)
E-Mail: kjun612@nifty.com

【編者】山下美智恵(新29回)

自動車産業不況に思う

九州朝陽会事務局長

小泉 純理(7回)

昨年暮れ、親戚に突然の不幸があり、急ぎ上京することになった。

久しぶりの上京に、時間と相談しながら学生時代の友人やら昔の仕事仲間と、できればつかの間の再会を、と考えていたのだが、福岡空港で連絡をとろうとして、不覚にも携帯電話を忘れてきたことに気がついた。手帳は保持していたものの、その住所録はほぼ白紙状態。東京に着いて、公衆電話で備え付けの電話帳を開いてみても個人の情報はほとんど掲載されていない。そもそも、その公衆電話自体がなかなか見当たらない昨今である。結局誰に会うこともかなわず、通夜と葬儀に参列しただけで、虚しく福岡―東京を往復するという苦い経験をした。

今さらながら、日常、いかに文明の利器に知らず知らず依存し、拘束されているかを感じ知らされた。戦後半世紀をかけて、文明(の利器)依存過多となったこの国の日常生活を考えてみれば、わが家の近隣でもほぼすべての家が車庫を設け、広くもない庭をなお狭くしている。そして健康維持のためなのか、硬い舗装道路を、朝晩、老若男女が黙々と小走りに走る姿を見かける。これはまさに文明の利器たる自動車に弄ばれた、今日の虚しい人間生活の象徴と言えるのではないか。

未曾有の自動車産業不振で、この国は経済不況、雇用不安などにみまわれている。考えれば、今日まで日本の経済発展の主たる一翼を担ってきたのが自動車産業とその輸出であることは認めるとして、はたして今後とも国策としてそうあり続けることが可能だろうか。おそらく今後は、発展途上にある後進の国などへ、交通手段としての廉価で高性能な車の供給が見込める程度ではなからうか。

昨今わが国で「公共事業における道路建設は無駄の象徴」のごとき世論が蔓延しているが、それ以前にこの国においては、今や、その車依存社会を見直す時がきているのではないかと考える。広い国土を有するアメリカ、中国などはいざ知らず、この山岳国日本で貴重な平地を非効率的に車の通行のために占有すること加えて限りある化石燃料を非効率的に消費し、大気汚染を現出すること自体が、無駄の根源ではないか。

私は、少なくとも一般都市住民に車の所持は基本的に不要に思う。必要な時にはレンタカーを利用することで事足りるような、肌理細かな公共交通機関、交通網の再整備こそが、今求められる100年の大計ではなからうか。

上京時の斎場は、昔のわが家に近い多摩霊園であった。半世紀以上昔青春の想いを胸に散策した新宿高校生時代。その頃、そこかしこにあっ

た武蔵野の雑木林はすでに見あたらず、建て込んだ家屋と、しきりに車の行き交う硬い舗装道路の索漠とした風景に、時の流れを思い知らされた。散歩ならば、直に大地を踏みしめる感触の、緑に囲まれた「武蔵野の道」がなつかしい。

事務局からのお知らせ

・平成21年度総会開催時期について
これまでの総会は毎年10月に開催してきましたが、参加者が20名台に固定しています。30名台を目指し、開催時期を検討中です。忘年会で2月頃にしてはとの声もありました。皆さんのご要望や趣向案などがありましたら、6月末頃までにメールその他で、事務局までお寄せください。

会報のバックナンバー

この会報もお蔭様で8号になりました。朝陽本部HP「支部だより」にバックナンバー全て掲載されており、自由に印刷もできます。広くお知り合いの同窓生にご紹介の上、九州朝陽会への入会をご勧誘くだされば幸いです。

年会費納付について

本年度年会費(千円)が未納の方に、「振込取扱票」を同封します。お早めに納付してくださいと助かります。

忘年会を開催しました

昨年暮の12月2日。福岡市六本松のもつ鍋屋「月川」で忘年会を開催しました。華燭の典を控えて超多忙の最年少白井氏も駆けつけ、10名の参加でした。

大分からの川邊氏(2回)は、トリニータの応援で上京されたばかり。何えは、シニア同好会の現役イレブンのこと。船バス



で志賀島からの寺田氏(9回)は、社交ダンスでは貴重な男性踊り手。「仙骨」を意識する健康体操を手ほどきしてください。一同酔いも程よく回ります。一桁先輩方の益々お元気なご様子に、最近寄る年波を感じていた29回生の編者は、過ショック。「月川」のメニューはもつ鍋だけ。独自の鍋と飲み物を次々お代わりしながら話題は尽きず、石井会長を中心に楽しい過食の典となりました。春にはお花見の宴をとの声もあり、事務局として思案中です。

白井康夫幹事お幸せに

九州朝陽会の貴重な若手メンバーで、幹事を務めてくださっている白井康夫氏が、小春日和に恵まれた昨年12月14日、福岡市内にて華燭の典を挙げられました。おめでとうございます。

